

国際看護研究会 NEWSLETTER No.26

Japanese Society for International Nursing

2002.7.18 発行

アジアで初めての開催となった日韓共催によるサッカーワールドカップも興奮冷めやらぬうちに幕を閉じました。多くの外国人が日本を訪れ民間レベルでの国際交流も図れたのではないかと思います。会員の皆様の中にも、経験を生かしてボランティア活動に参加された方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

本号の内容は以下のとおりです。

I. 運営委員会報告	p.1
II. 第 25 回国際看護研究会報告	p.1
III. 第 26 回国際看護研究会（第 5 回学術集会）のお知らせ	p.5
IV. 国際看護研究会第 5 回総会のお知らせ	p.6
V. 海外情報－ウィスコンシン大学留学記（3）	p.6
VI. 皆様へのお願い・お知らせ（事務局より）.....	p.8

I. 運営委員会報告

第 22 回運営委員会は 2002 年 6 月 15 日（土）に開催された。9 月 14 日に開催が予定されている第 5 回学術集会の準備状況についての報告、昨年度及び今年度の会計報告・予算および事業報告・企画、懸案の新しいホームページの取扱い等について検討を行った。また昨年度会費が 6 月末までに未納の会員は規約により名簿から削除されるが、削除前に葉書で督促することにした。

II. 第 25 回国際看護研究会報告

（2001 年 6 月 15 日（土）国際協力事業団青年海外協力隊事務局広尾訓練研修センターにて開催）

第 25 回国際看護研究会は、札幌医科大学、保健医療学部^{みちのぶ}の道信良子先生に、国際保健活動における医療人類学の役割について、タイ国での研究活動をご紹介いただきながらご講演いただきました。

<抄録>

「医療人類学と国際看護」

札幌医科大学 保健医療学部

道信良子

初めに、看護学をはじめとする保健医療の学問領域において、医療人類学に対しどのような感心と期待が向けられ、その関心と期待に医療人類学はどのように応えてきたかについて述べ、次いで、わたしが現在行っている研究について述べさせていただきます。

医療人類学に対する関心と期待は次の4点にまとめることができます。

1. 人間にとっての健康や病いを根本的に問い直す。
2. それにより、現代の医療をめぐるさまざまな問題に対する解決の糸口を与える。
3. 国際保健医療活動において、現地の人々の生活習慣、社会体系、衛生観念、病気観などの情報を提供する。
4. 人間の身体、健康、医療を医学的、歴史的、社会文化的視点から包括的に理解し、人間の健康やより豊かな人生の構築をめざして行われる学際的な研究としてのヘルス・リサーチの一つの方法論を提示する。

1. 人間にとっての健康や病いを根本的に問い直す。

人間にとって健康であることや病気になることはそもそも何であろうかという健康や病に対する根本的な問いに、医療人類学は一つの視点と方法を使って答えてきました。医療人類学者は異なる文化の身体観、健康観、治療行動について詳細に述べ、自分の文化におけるそれらの概念や行動との違いを発見することにより、身体や病いについて自分が持っている認識の枠組みとは異なる枠組みに直面します。そしてそのズレを体験することにより自分たちの認識の枠組みを相対化してみる視点を得ることができます。これを文化相対主義といいます。医療人類学者は文化相対主義の視点から人間にとって健康であること、病むこと、障害を持つこと、老化すること、死ぬこと、そして癒すことや癒されることとは何かということを根本的に問い直そうとしてきました。

文化相対主義の視点から人間の健康や病いについて考えるとことは保健医療の領域においても有効であろうと思われます。たとえば、治療を行う人々と治療を受ける人々で身体観や治療観が異なるのをみることで、近代西洋医学の知識や近代的な医療体制のもとで培われた治療に対する一つの認識の枠組みが取りこぼしてしまったものを見出すことができます。医療提供者と患者とのコミュニケーションをめぐるさまざまな研究は、両者の間の身体観、病気観、治療観のズレを示すことで、人間にとっての健康や病気の意味の豊かさを表し、さらに現代医療のさまざまな問題に対する解決の糸口を与えてきたのです。これが次に述べる医療人類学の応用学としての有効性です。

2. 現代の医療をめぐるさまざまな問題に対する解決の糸口を与える。

医療現場で起きる問題の多くは、医療の与え手の受け手との、身体、病い、健康、治療についての考え方の違いに原因があり、また、医療が行われる場としての組織のあり方や人間関係にも原因があるように思われます。医療人類学の一つの起源であり、隣接領域である文化人類学はその成立の初期のころから、自分とは異なる社会の組織や人と人とのかかわりについて詳細な調査を行い、人間の縦のつながりを説明するための親族体系や人間の横のつながりを表すためのソーシャル・ネットワークの概念を生み出してきました。人と人とのかかわりについての理論や分析概念は、医療現場における組織のあり方や人間関係を再考するための有効な手がかりになり、医療現場で生じているさまざまな問題に対する解決の糸口を与え得るものです。たとえば、看護師のストレスという問題を取り扱う際に、ストレスを個人の病いとみなし医学的、心理学的に対処するのも一つの方法ですが、看護師と周囲の人々との人間関係のありかたや組織のありかたそのものを根本的に問い直すことも解決の糸口を見つけ出す一つの方法です。医療現場において一つのソーシャル・ネットワークを形成する看護師と周囲の人々との関係は、相互扶助的でありながら望まない義務を伴うこともあり、サポートとなる一方でストレスの源ともなります。その様相を詳細に調べることで、人間関係や組織のあり方に起因する医療現場の問題点を明らかにすることができるのです。

3. 国際保健医療活動において、現地の人々の生活習慣、社会体系、衛生観念、病気観などの情報を提供する。

第二次世界大戦以降、アメリカやヨーロッパ諸国などの先進諸国から発展途上国への技術援助が拡大し、公衆衛生計画も世界各地で見られるようになりました。そのなかで、途上国の人々の医療観や医療行動に関する資料を提供する役割を文化人類学が担いました。また、病気は生物学的現象であると同時に社会・文化現象であり、途上国における保健医療活動を成功させるためにはその国の社会体系や信仰などを十分に理解する必要があるという前提に立ち、途上国の社会と文化に関するさまざまな情報を提供しました。このような国際保健医療プロジェクトへの参画が医療人類学という学問の成立と発展に大きな貢献を果しました。

国際保健医療プロジェクトに参画する人類学者は保健医療サービスを移植する側と受ける側との間で仲介役をすることが期待されます。人類学者は両者の誤解を解き、コミュニケーションを改善することに力を注ぎますが、単に両者の関係だけを見ているのではなく、保健医療システムをより広い視野で見ようとします。たとえば、エイズ予防の国際保健医療活動では、エイズが蔓延する地域にすむ人々、その地域の保健医療従事者との関係だけではなく、地域レベルのエイズ予防計画やサービスを左右する国際レベルのエイズ予防政策計画書、さらにはその国のエイズ予防政策計画者に経済的援助や行動指針を与える国際的な予防政策立案者との間の利害関係やコミュニケーション障害なども視野に入れて、コミュニティの仲介役としての役割を果たすのです。

国際人類学の古典的名著を書いた Foster and Anderson [1987 [1978]] は、医療人類学とは、健康水準の改善を目的とする計画に専門家として参画するという実践であり、これは単に社会・文化的な情報を提供するのではなく、生物、社会、文化現象と健康との関連性のより高度の理解を通して、健康改善を進めると考えられる方向へ保健行動を変化させることを通して行われると述べています。 (Foster and Anderson 1987 (1978) : 21

この視点は国際医療協力にかぎらず、あらゆる保健医療活動においてきわめて重要なものと思われます。なぜなら、人間の健康と医療を医学的、歴史的、社会的、文化的、公衆衛生学的、看護学的視点から包括的に理解することを促し、一つの学際的な健康科学あるいはヘルス・リサーチという領域を確立するからです。

4.人間の身体、健康、医療を医学的、歴史的、社会文化的視点から包括的に理解し、人間の健康やより豊かな人生の構築を目指して行われる学際的な研究としてのヘルス・リサーチの一つの方法論を提示する。

ヘルス・リサーチは日本においてこれからの発展が期待される学際的な研究領域です。文化人類学の学問領域で発達した独自の方法論であるエスノグラフィー（民族誌）は、社会全体を詳細にかつ体系的に説明するものであり、ヘルス・リサーチの方法論的發展に大きな役割を果たすと思われます。なぜなら、ヘルス・リサーチは疾病の診断や治療方法の研究に限らず、民族医療、女性と健康、ヘルス・サービス、栄養、精神衛生、子どもと健康などについての研究のネットワークであり、多彩でありながら包括的な視点を重視するからです。

エスノグラフィー（民族誌）とは、人類学者が研究領域における長期のフィールドワークを通じて得た詳細なデータをまとめたものです。フィールドワークでは半年から二年ほどの期間、現地で現地の人々とともに生活しながら生活習慣や社会体系をはじめとするさまざまな情報を集めます。現地の人々の生活に長期にわたり入り込むことによって得られるものは他の調査方法とはいくぶん異なっています。たとえば、現地の人々と親しくなり言葉を学ぶこと、現地の人々から信頼を得ることで他人にあまり話さないことについても聞くことができるようになること、人々の暮らしの時間的変化を追うことができること、不慣れな状況に適応しようとする調査者自身の体験や努力がデータとなることなどです。

エスノグラフィー（民族誌）は保健医療の学問領域では、「質的研究」の一つとみなされていますが、「質的研究」を含むより広い領域である社会科学の研究方法論に位置づけられるものです。「質的研究」をめぐる理解は学問領域により異なるように思われますが、保健医療の分野では質的研究を量的研究との対比で理解することが多いように思われます。たとえば、量的研究では仮説を立てて検証するけれども、質的研究ではデータの分析から仮説をつくりあげるという理解です。これらのイメージを完全に否定するものではありませんが、民族誌的調査においても統計処理を必要とするデータをとることもあ

りますし、あらかじめ仮説を立てて調査に臨むこともあります。民族誌的調査ではむしろ、あらゆる手段を尽くして現地に生きる人々の生活を包括的に理解しようとしします。すなわち、「質的研究」の枠に収まるものではありません。保健医療の分野でエスノグラフィー（民族誌）を活用するとすれば、「質的研究」の一つとしてではなく、ヘルス・リサーチという包括的な研究領域に位置づけて、ヘルス・リサーチ全体の豊かで創造的な発展のために活用することが望まれます。

最後にわたしが現在行っている研究活動について述べさせていただきます。

現在、北部タイで操業する企業で工場労働者として働く若者に提供するエイズ教育の見直しを、リプロダクティブ・ヘルスやセクシュアル・ヘルスを統合した保健サービスの開発とともに進めるための準備を行っています。これまでの活動はおもに、1997年から2000年までの合計13ヶ月の北部タイにおける民族誌学的調査です。工場で働く女性たちのHIV感染リスクにテーマを絞り、彼女達の性規範、性行動、家族関係、友人関係、HIV感染予防行動などを調査しました。今後は保健省や地域のNGOを含む関係機関からの支援を頂きながら、現在、工業団地や近辺のコミュニティで行われているエイズ教育を若者にニーズに見合ったものを改善できるよう調査・活動をしていく予定です。しばらくはタイに限定された議論になりますが、他の地域への応用可能性も考えながら進めていきたいと思っております。

Ⅲ. 国際看護研究会第5回学術集会（第26回国際看護研究会）のお知らせ

すでにお手元に「ご案内」をお送りいたしました。第26回国際看護研究会は、第5回学術集会として開催されます。演題の募集は7月15日をもって締め切らせていただきましたが、事前の参加申し込みは、8月20日までとなっておりますので、皆様お誘い合わせの上、是非ご参加ください。尚、当日参加の受付も承りますが、できれば「ご案内」に同封されております振込用紙をご使用の上、事前に参加費を納入いただきますようお願い申し上げます。

- ・日 時：2002年9月14日（土）9:30～17:00
- ・会 場：国際協力事業団青年海外協力隊事務局広尾訓練研修センター
東京都渋谷区広尾4-2-24
- ・テ ー マ：「災害看護と国際協力～地域の防災力を推進する看護の役割～」
- ・プログラム：基調講演 第5回学術集会会長 小原 真理子
(日本赤十字武蔵野短期大学 助教授)
- ワークショップ
- ・参 加 費：会員 2000 円（学生 1000 円）
非会員 3000 円（学生 1500 円）
弁当代 1000 円（必要な方のみ）

＊ 参加費には抄録代が含まれております。

- ・ 参加申込み：口座番号：00260－1－29431 口座名称：国際看護研究会学術集会
8月20日（火）までに、参加費および弁当代（必要な方のみ）を郵便振替にて学術集会口座までお振込ください（年会費用の口座とは異なりますので、ご注意ください）。

尚、振込用紙は参加者1人につき、1枚を使用し、通信欄に会員・非会員及び一般・学生の別と弁当申し込みの有無をご記入ください。弁当を申し込まれても代金1000円が振り込まれていなければ弁当のご用意はできませんのでご注意ください。

- ・ 問い合わせ先：〒180-8618 東京都武蔵野市境南町1－26－33
日本赤十字武蔵野短期大学 長谷部 史乃
お問い合わせはなるべく FAX か E-Mail でお願いします。

IV. 国際看護研究会第5回総会のお知らせ

国際看護研究会総会が、第5回学術集会に併せて開催されます。会員の皆様は是非ご出席いただき、積極的な発言などをお願いいたします。

日 時：2002年9月14日（土） 12:30～13:30
会 場：国際協力事業団青年海外協力隊事務局広尾訓練研修センター
2階第1会場（体育館）

V. 海外情報

ウィスコンシン大学留学記（3）

アメリカ合州国ウィスコンシン大学マジソン校
看護学部大学院博士課程 根本恵子

前回予告したとおり、今回は指導教官の仕事の手伝いを通じてかかわっている、季節労働者のことについて書こうと思う。季節労働者とは、農業の収穫期など人手のいる仕事を求めて半年毎に国内を移動する出稼ぎの人達である。この国でとれる野菜や果物の多くは、季節労働者の手によって収穫され、出荷されている。季節労働者の多くは、南部のテキサス州かメキシコを主とする中南米出身である。話す言葉はメキシコ出身の労働者は主にスペイン語である。加えてテキサス出身の季節労働者も、家族が中南米からの移民だったり学校で習った英語とは別に、家ではスペイン語で話をする人が多いという。

季節労働者のことに係わるようになったのは、ほんの偶然に近い。その当時、私は博士

課程へ進学したい一心で、教授の研究プロジェクトを手伝う補助員の仕事を探していた。教授の仕事を手伝えれば授業料を払う必要がないからである。貯金を使い果たした私には、補助員の仕事は魅力的だった。そんな折、ある講義に出たときに、ゲストスピーカーとして呼ばれたR先生に会った。その先生は、アクションリサーチ法を使って研究をしており、その紹介をするために講義に呼ばれたのだった。講義の内容は、ドメスティック・バイオレンスを受けた季節労働者（女性）に対する支援体制のあり方についてであった。この講義の最後に先生は、自分のプロジェクトを手伝う補助員を探しているから興味のある人はいつでも来てくれと言葉を残して行った。その時私は、「この仕事はいける」と思った。移民女性の健康問題に関心があったからそれに関する文献を少しは読んでいたし、海外青年協力隊を通じて身につけたスペイン語が役に立つかもしれないと思ったからである。この仕事だったら、もしかして雇ってもらえるかもしれないと思った私は、すぐに先生に面接を願った。結果は、博士課程に合格したら採用するであった。その後は、とんとん拍子でことが決まっていっていった。看護大学からは、博士課程への進学を認める連絡が入り、先生からは補助員としての採用を知らされた。しかも、その先生が私の指導教官をすることになった。

実際に先生の仕事を手伝ってみると、季節労働者が抱える問題は多岐に渡り、しかも根が深いことを実感する。保健医療問題だけでなく人権問題にまで派生しているからである。例えば、季節労働者が簡単に利用できる医療機関の数は、ここウイスコンシン州ではかなり限られている。言葉の問題として、スペイン語がわかる看護婦や医者の方が極めて少ないのである。お金の問題もある。健康保険がない人は、医療費が高すぎて治療代を払えないのがこの国の現状である。雇い主のなかには季節労働者に健康保険を与えない人もいると聞く。しかも、季節農業労働者の給料は日当6ドル程度と極めて低く、マジソン市内における米国人学生アルバイトの時給にも満たない。高い医療費を払うぐらいだったら、少しぐらいは体調が悪くても我慢して仕事をし、お金を稼いだほうがいいと思うのは一人だけではないだろう。また、季節労働者が抱える問題は、保健医療施設へのアクセスだけではない。季節労働者を囲む環境である住居の問題もある。季節労働者が住む住居（キャンプと呼んでいる）を訪れたことがあるが、設備は極めて簡素である。中には、生活費を切り詰めるのに車の中で寝泊りをする家族もいるらしい。加えて、季節労働者のライフスタイルそのものが社会から隔離されてしまっている。季節労働を続けるには、激しい肉体労働をするための体力が必要である。したがって、働き盛りの男性による単身移住、または若い夫婦と小さな子供を連れた小さな家族単位での移住にならざるを得ない。年老いた親や他の家族はメキシコに残ることになる。このため、季節労働者にとっては、頻繁に家族に会ったり、気軽に電話で話をするということが難しくなる。なにか困ったことが生じて、遠く離れた家族に簡単に頼ることができない状況にいる。かといって、キャンプに住む隣近所の人に頼れるかということも難しい。季節が変わる半年毎に仕事を求めて南から北、東から西へと米国内をはるばる移動するから、隣近所との関係も希薄にならざるを得ないのである。キャンプにいる季節労働者を続けるには、体も心もタフでないとやって

いけないのは一目瞭然である。

このような季節労働者の現状を知れば知るほど、心が痛む。看護に携わる者として少しでもそう言った言葉や背景の違う彼らの力になればいいなと思う。豊かなアメリカの国の陰で支えている季節労働者がどんなふう働き、生活をし、どんな問題を抱えているかが、この紙面を通じて読者の皆さんに少しでも伝われば幸いである

VI. 皆様へのお願い・お知らせ（事務局より）

1. 本研究会は会員の皆様から振り込み頂く年会費（2千円）により運営されています。
2002年度会費未納の方は、至急お振り込み下さい。封筒宛名の名前の後ろに会員番号と（ ）内に最終支払い年度が記されています。なお前年未払で本年度会費を振り込まれた方の会費納入は前年度分扱いとなっておりますので、ご確認ください。
郵便振込先：00150-6-121478 国際看護研究会（学術集会用口座とは別です。ご注意ください。）
2. 転居された方は研究会事務局にも新住所をご連絡下さい。
3. NEWSLETTER の「海外情報」に掲載する記事を募集しております。会員の皆様の活動報告、活動国の様子、医療事情あるいは旅行記など海外に関する情報をお待ちしております。事務局までお送り下さい。
4. 会員の皆様からのご意見を反映して研究会の活動のさらなる改善を図りたいと思います。講演のテーマ、NEWSLETTER についてなど本研究会へのご意見をお聞かせ下さい。
5. 本会ホームページのプロバイダを変更することになり、現在手続き中です。URL も変わりますが、新しいURL は次号にてお知らせいたします。

編集後記：

飢餓や疾病の広がりや南部アフリカが危機状態にあると新聞の報道にあった。かつて難民キャンプに滞在していたザンビアも含まれており、心穏やかではいられずにいる。子供たちが空腹に耐えられない状況で生活していたり、栄養失調が引き起こすさまざまな病気で苦しんでいることを想像すると胸が痛む。悲しみ、祈るばかりでなく、友人らに呼びかけ、何らかの援助にかかわりたいと思っている(伊藤)。

知人が、日本の絵本を現地語に翻訳・紹介するという、未来の宝である子供たちの心を育む作業に取り組んでおり、陰ながら応援させていただいている。すでに政府関係者の目にも留まり、またその本を読んだ親・子供からも感想が届いているそうだ。時間はかかるだろうが、確実に世界平和の種を植えている活動だと思う(田中)。

道信先生の「人間にとって健康であることや病気になることはそもそも何であろうか」という問いは、我々文化を超えて健康を支えようという者にとっては、重要な問いである。

私たちが伝えようとする健康、看護に関する知識、技術には、我々の価値観がついてまわる。その価値観をどれだけ「相対化」できるか。国際看護に関わる者の大切な資質であろう。根本さんからは、アメリカの季節労働者研究に関する報告が届いた。住居が移動する、保険をもたない、医療機関受診の遅れ、雇用者が保険をかけたがらないなど、日本における外国人医療の問題と共通する部分がある。アメリカの現状を鏡に、日本の外国人医療を考える一助となるであろう。続報を期待する（柳）。

国際看護研究会連絡先（事務局）／NEWSLETTER 発行元

年会費郵便振り込み先：口座番号 00150-6-121478

ニュースレターの記事に関して無断転載を禁じます。

皆様のご理解をお願いいたします。